

## 「がん教育」の実践について

俱知安町立俱知安小学校  
(前任校 余市町立大川小学校)  
田中 美乃里

### (1) はじめに

余市町立大川小学校は、児童数約240名、日本海を前に校舎を構えた、創立136周年の歴史ある学校である。

第6学年は明るく活発的で、休み時間には積極的に体を動かしたり、下級生のお世話をしたりと、何事にもひたむきに取り組む学年である。しかし、朝食欠食率や孤食率が高かったり、スマホやオンラインゲーム等で睡眠不足を招いたり、生活習慣や家庭環境に課題のある児童も多かった。

そこで、がん教育を通して、がんについて正しい知識を身につけることによって、児童が主体的に健康について考え、生命の尊さや、自分や身の周りの人たちを大切にすることを育むことをねらいとした。

### (2) 実践内容

第6学年の体育科の保健領域において、がんと生活習慣病の予防を関連づけた授業を実践した。

#### ① 「がん」ってなんだろう？

導入として、がんに対して児童がどのようなイメージをもっているかを聞いた。児童は「死」「つらい」「苦しい」などの言葉を口にした。がんに対して暗いイメージをもっていることがわかった。

- がんに罹るメカニズム(どうしてかかるか)
- 二人に一人がかかると言われている病気であること
- かつては「不治の病」とも言われていたが、がんと共に生きながら活躍している人が多くいること

を伝え、がん患者は年々増えているが、医学の進歩により、助かる人も多くなったことを確認した。



#### ② どうして、がん患者は増えているのか

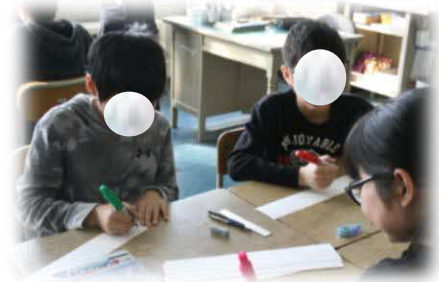
がん患者増加の原因について考えさせた。  
□がんには様々な種類があること(大腸・胃・肺など)

□がんは生活習慣や遺伝的要因、感染など、様々な要因があること

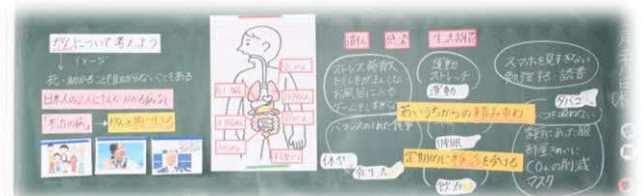
特に小学生のうちから密接に関わるものは生活習慣であることに目を向けさせた。

#### ③ がんにならないために、なにができるか

がん予防として、自分たちはどのようなことができるのか班活動で考えさせた。



短冊にそれぞれ思いついたものを書き、全体交流しながら、カテゴリ分けしていった。



＊ ＊ 児童が考えたもの ＊ ＊

- 食生活**…バランスよく食べる
- 飲酒**…お酒を飲まない、飲みすぎない
- 喫煙**…タバコを吸わない、吸っている人の近くに寄らない
- 運動**…てきどりに運動する、ストレッチ
- その他**…ストレス発散する、スマホを見すぎない、勉強する(知識を増やす)など

これらの習慣を若いうちから積み重ねていくことによって、がんのリスクを減らすことにつながることを伝えた。

また、班活動では出なかったが、定期的に検診を受けること、早期に治療することも、大切であることを確認し、がん予防について考えを深めることができた。

#### ④ もし、身近な人が(自分が)がんにかかったらどうすればいいか

がん患者の話として、授業者の家族のエピソードを話した。がんにかかった姉と、いつもそばで見守っていた母親に、当時の状況や心境を改めてインタビューし、児童に伝えた。



「姉は高校2年生のとき、学校で受ける内科健診で、甲状腺部分に異常があると言われた。専門の病院で詳しく診てもらおうと、悪性のがんであることが判明し、すぐに入院することとなった。」

そして、当時の姉と母の心境を話した。姉は「元気だったから、とにかくびっくりした。自分もがんになるんだと思った。」母は「どうしてうちの子がかかってしまったのだろう。私が何か悪いことをしてしまったのかなと思った。」

「手術は無事に成功した。現在は、再発することもなく、元気に働きながら暮らしている。それも、健康診断で早期発見して、すぐに治療できたからこそ。がんは自覚症状が出るまでは、気づけないこわい病気でもある。」

真剣な表情で聞き入ってくれた児童は、高校生という若い年齢でもがんにかかる人がいることを知り、衝撃を受けていたようである。健康診断を受ける大切さや、がんにかかった人、その家族の思いを知るきっかけとなっていたのではないかと感じた。

#### ⑤ 自分の家族や未来の自分にメッセージを送ろう

今回の実践ではワークシートを使わず、メッセージカードを活用して、授業の理解度やがんに対してどのように感じたかを見取ることにした。



未来の自分宛てには、生活習慣を整えたり、検診を受ける大切さを伝えたりしている児童が多かった。家族に宛てたメッセージは心温まる言葉がたくさん書かれていた。

#### (3) 成果と課題

成果として、児童が授業後に質問してきたり、給食の際には好き嫌いをしている児童がいたら、周りの児童が声をかける様子が見られたりと、児童の意識の高まりが見られたことである。また、学校の教育課程として組み込まれ、今後も継続して実施されることとなった。

今回、初めてのがん教育の実践ということもあり、手探り状態で第6学年の学級ごとに「保健」の時数1時間を活用した。今後の課題としては、がん教育を保健領域だけではなく、他教科とも関連づけながら、児童の発達段階に応じて実施内容を検討することである。また、家族にがん患者がいる児童がいた場合、学級担任や家庭とも連携しながらフォローしていく必要があると感じる。

#### (4) おわりに

今回の実践を通して、今日の教育現場においてがん教育が必要であることを実感したとともに、がんは医療・医学の進歩により、常に情報が更新されていくため、教員は日頃から学んでいかなければいけないと強く感じた。今後も、児童が主体的に健康について考え、自他を大切にできる気持ちを育めるような保健教育を充実させたい。

